

京都大学映画メディア合同研究室主催第1回シンポジウム  
「ポスト・シネマの映像——ゆるる身体とメディアの今——」

---

発表者2

小城大知（東京大学大学院）

タイトル

政治動乱に対する別の振舞を目指して

——パリ五月期におけるザンジバル・グループとその周縁をめぐって——

発表要旨

1968年というのはフランス映画界における大きな転換点となった。パリ、シネマテーク・フランセーズの責任者であったアンリ・ラングロワの解任から始まりカンヌ国際映画祭粉砕事件、そして五月革命という激動の出来事は、多くの映画監督たちに抵抗の動きを促し、各地で集団での映画製作を行わせる契機となった。だが、これまで1968年代の映画の集団製作として着目されたのは、ゴダールらが商業映画の脱却と政治映画への製作の場として結成したジガ・ヴェルトフ集団や、ゴダールやルルーシュらが共同制作した『ヴェトナムから遠く離れて』の公開以降クリス・マルケルの指導の元結成されたSLONを母体に、ブサンソンなどのルノー工場労働者ストライキのために各地に結成されたメドヴェトキン集団に見られるように、製作体制の目的が闘争する身体を映し出し、当時のド・ゴール体制に直接対峙することを目的とする映画製作を目的とする集団製作であった。そこで本発表では、1968年5月に対する別の振舞＝身体表現を目指した映画製作集団について検討する。その中で「68年五月のダンディー」の立場をとり、前衛芸術を活用しながら映画製作を行ったザンジバル・グループを分析する。ザンジバル・グループは、ヌーヴェルヴァーグ運動や68年5月革命など映画をめぐる動乱に目配せしながら、シルヴィナ・ボワソナの庇護の元、フィリップ・ガレル、パトルック・デュバル、セルジュ・パールなど映画監督にとどまらず様々な芸術家が参加し、1968年に対する抵抗表現として宗教やジョルジュ・バタイユといった文学への傾倒、実験手法を用いることで、放浪や逃走といった不安定な身体を表現することに特徴がある。本発表ではまたそのような身体表現を分析することで、体制との直接的な対立とは異なるこの身体表現がどのような映画的意義を持っていたかを分析する。また前衛表現の活用など別の振舞を模索する動きを見せながら映画の形式がフィルムで生まれたザンジバル集団及び、編集行為をフィルムの切り貼りに生み出している編集者ジャッキー・レイナルの立場性と、配信によって本集団が受容されているという現状との間に存在している矛盾から「ポスト・シネマ」という問いを考えていきたい。